世界ミステリ全集

12

嫌　疑
ペトロフカ、38
裏切者

フリードリッヒ・デュレンマット
ユリアン・セミョーノフ
ジョルジョ・シェルバネンコ

早川書房

世界ミステリ全集　12

フリードリッヒ・デュレンマット
「嫌疑」前川道介訳
ユリアン・セミョーノフ
「ペトロフカ、38」飯田規和訳
ジョルジョ・シェルバネンコ
「裏切者」千種　堅訳

〈検印廃止〉

1972年12月20日初版印刷　　1972年12月31日初版発行
発行者　早川　清　　東京都千代田区神田多町2～2
発行所　株式会社早川書房　東京都千代田区神田多町2～2
電話　東京（254）1551～8　振替　東京47799
印刷所・株式会社亨有堂印刷所　製本所・株式会社明光社
本文用紙・本州製紙株式会社
表紙クロス・本州リンソン／英国ワトソン社製
函紙・駿河製紙株式会社
製函所・株式会社佐藤製函所　　定価1200円

〈乱丁本・落丁本は本社にてお取り替えします〉　0397-807120-6942

目次

嫌疑……3
ペトロフカ、38……111
裏切者……325
F・デュレンマット／IO・セミョーノフ／G・シェルバネンコについて〈座談会〉……515
F・デュレンマット著作リスト……539
IO・セミョーノフ著作リスト……541
G・シェルバネンコ主要著作リスト……542

函・扉・表紙／勝呂　忠

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

嫌疑

フリードリッヒ・デュレンマット
前川道介訳

DER VERDACHT

by

FRIEDRICH DÜRRENMATT

嫌

疑

登場人物

ハンス・ベールラッハ……警部
ザムエル・フンガートーベル……ザーレム病院の医師
フリッツ・エメンベルガー……ゾンネンシュタイン病院の経営者
エーディット・マーロック……同病院の女医
クレーリ・グラウバー……同病院の看護婦
ネーレ……ナチ収容所の医師
ガリヴァー……ユダヤ人．ナチ収容所の生残り
フリードリッヒ・フォルチッヒ……文士、〈リンゴ射ち〉の発行人
ルッツ……予審判事．ベールラッハの上役
ブラッテル……巡査．ベールラッハの部下

第一部

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ベールラッハは、一九四八年十二月のはじめにザーレム病院へ入れられた。市庁のある旧ベルン市街がそこからよく見える病院だった。心臓の発作が起ったため、緊急を要する胃の手術が、二週間も延期されていたが、いざそのむずかしい手術にとりかかってみると、具合よくいった。しかし、予期したとおりの、絶望的な病気であることが分った。警部は重態だった。上役の予審判事ルッツは、二度、警部が死んだと知らされ、そのたびにまだ生きていると聞いてほっとしたものだ。警部は、クリスマスの直前になって、ようやくもちなおした。クリスマスじゅう眠っていたが、二十七日（月曜日だった）には、元気になって、一九四五年発行の〈ライフ〉の古い号をあれこれ眺めていた。

「獣みたいなやつだったんだなあ、ザムエル」フンガートーベル医師が、夕暮れの病室へ回診にきたとき、警部は言った。「獣だったんだ」と医師にその号を渡して、「君は医者だから、想像できるだろう。まあ、このシュトゥットホーフの強制収容所の写真を見たまえ！　収容所医師のネーレという奴が、囚人に麻酔なしで腹部切開の手術をやっているところが撮影されているんだ」

ナチスがよくやったことだ、と言いながら、医者はその写真を見ていたが、雑誌をおこうとしたときは顔色がすっかり青くなっていた。

「いったいどうしたんだ？」と病人があきれて尋ねた。

フンガートーベルは即答をさけ、雑誌をひろげたままベールラッハのベッドの上へおき、白い上っ張りの右の胸ポケットから角縁の眼鏡を取り出すと、――警部は気づいていたが――かすかに手をふるわせながら、それをかけて〈ライフ〉の写真を眺めなおした。

どうしてこんなに興奮するのだろう？　とベールラッハは思った。

「馬鹿な」と、とうとうフンガートーベルが怒ったように言うと、その号を、ほかの号がおいてある机のうえにおいた。「さあ、手をかしたまえ。脈を見よう」

一分間、二人はものを言わなかった。それから医師は友人の腕を放すと、ベッドの上の体温表を見た。

「ハンス、具合はいいよ」
「もう一年の生命かい？」
フンガートーベルは困ってしまった。「そのことについては、いまは話さないことにしようや。身体に気をつけて、また警察の仕事にかえれるようにしなくちゃ」
老警部は、注意しよう、と不平らしく言った。
それは結構、とフンガートーベルは部屋を出ていこうとした。
「もう一度、〈ライフ〉を貸してくれよ」と何でもないような顔をして病人がせがんだ。フンガートーベルはサイド・テーブルに山のように置かれた〈ライフ〉から一冊とってやった。
「それじゃない」と言った警部は、ちょっとからかうように医者の顔を見た。「おれから君がとりあげたやつが見たいんだ。強制収容所とそう簡単に別れられないよ」
フンガートーベルはちょっとしぶったが、ベールラッハがじっと自分に視線をそそいでいるのに気がついて、赤くなった。そしてその号をとってやると、何か不愉快なことでもあるように、素早く部屋を出ていった。看護婦が入って来た。警部はほかの号をもち去るように言った。
「それは？」と看護婦はベールラッハの掛布団の上の号を指さした。
「うん。これはおいていっておくれ」
看護婦が立ち去ってから、彼は例の写真をもう一度眺めて見た。野獣のような実験を冷静にやっている医者は、まるで異教徒の偶像のような感じを与えた。その顔の大部分は、鼻と口を覆うマスクでかくされていた。
警部は雑誌をサイド・テーブルの抽き出しにしまいこむと頭のうしろで両手を組み、かっと眼を見開いて、次第に部屋をひたして来る闇をじっと見つめていた。彼は明かりをつけようともしなかった。
しばらくして、看護婦が食事をもって来た。依然として量がすくないうえに、病人食だった。オートミールと菩提樹花の茶だったが、これを好まない彼は、茶には手をつけず、オートミールだけ啜ってから、明かりを消すと、あらためて次第に濃くもののあやめが分らなくなっていく闇を見つめだした。
彼は窓ごしに町の明かりを見るのが好きだった。
看護婦がベッドを直しにやって来たとき、警部はすでに眠っていた。
翌朝、十時にフンガートーベルがやって来た。
ベールラッハは、両手を頭のうしろで組んで横たわって

いた。布団の上には、あの〈ライフ〉が開いたままおかれていた。彼の両眼はじっと医者にそそがれていた。フンガートーベルは、それが例の強制収容所の写真であるのに気づいた。

「おれが君にこの写真を見せたとき、なぜ死人のようにまっ青になったのか、説明してくれないか？」と病人がきいた。

フンガートーベルはベッドのところへいき、体温表を下ろしていつもより注意して調べると、もとのところへ掛けた。

「馬鹿馬鹿しい誤りだったんだよ、ハンス」と彼は言った。

「話す値打もないことさ」

「じゃ君はこのネーレという医者を知ってるんだね？」と言うベールラッハの声は、奇妙に興奮していた。

「いや知らん」とフンガートーベルは答えた。「或る人物を思い出したんだ」

ずいぶん似ているらしいな、と警部が言った。

医者は、うん、よく似ている、とそれを肯定して再びその写真を見たが、再び不安に襲われたらしいことを警部ははっきり見とどけた。医者は、だがこの写真では顔が半分だけしか分らない、手術着をきた医者は、みな同じように見えるからなと医者は言った。

「この畜生で誰を思い出したんだね？」と老人が無情に問いつめた。

「だっておよそナンセンスなんだぜ！　まちがいに違いないと言ったじゃないか」

「それでもやっぱり半信半疑なんだろう、ザムエル？」

「うん、絶対そうじゃないということを知っていなければ、彼だと主張するだろう。だがこんな不愉快なことは、ほっておいたほうがいい。生きるか死ぬかの大手術を受けた直後に古い〈ライフ〉なんか見るのは、よくないよ。この医者は」と再び催眠術にかけられたように、その写真を眺めながら、「おれの知っている医者じゃない。だってその医者は、戦争中チリーにいたよ。したがって誰でも分るだろう。疑うのはナンセンスなんだ」

「へえ、チリーにね、チリーにね」と、ベールラッハは言った。「君のいう問題外のその男は、いったい、いつ帰って来たんだね？」

「一九四五年だ」

「チリーにね、チリーにね」とベールラッハはまた言いだした。「だが君は、この写真で誰を思い出したのか、おれに言いたくないらしいな」

フンガートーベルは返答をしぶった。この老医にとっては厭な事件だったのである。
「ハンス、おれがその名前を言うと、君はその男をあやしいと思うだろう」と彼はようやく言った。
「もうあやしいと思っているよ」
フンガートーベルは溜息をついた。「なあ、ハンス、それを怖れていたんだ。おれはそんなことは困るんだ。な、分ってくれるだろう？　おれは老いぼれ医者で、誰にも迷惑はかけたことはないと思っている。君の嫌疑は妄想さ。単に一枚の写真から、一人の人間に嫌疑をかけるわけにはいかん。まして顔が半分以上もわからぬ場合はなおさらだ。それに彼はチリーにいた。これは事実だよ」
一体チリーで何をしていたんだ、と警部が口をはさんだ。
「サンチャゴで病院をやっていたんだ」
「チリーでね、チリーでね」とベールラッハはまた言った。「こいつは危険信号だ。詳細に調査も出来んしね。ザムエル、君の意見は正しい。嫌疑というやつは怖ろしいもので、悪魔にその源を発するものだよ」それからつづけて、「嫌疑ほど人間性を損うものはない。おれはそのことをよく知っている。だからおれは、自分の職業を呪ったこともしばしばある。人は嫌疑なんかとかかわらないに限るんだ。だがおれたちはもう嫌疑をもってしまった。君がおれにそれをくれたんだ。ねえ、だから君がその嫌疑を解消すれば、おれもよろこんで返上するよ。だが、君はその嫌疑を解消してないじゃないか」
フンガートーベルは老警部のベッドの前に坐った。そして途方にくれて彼のほうを見た。カーテンごしに日光が斜めに部屋へさしこんでいた。外は温かなこの冬らしく晴れていた。
しばらくして、とうとう医者が、静かな病室の沈黙を破って言いだした。「そうだ、おれはどうしても嫌疑をふりはらうことができない。おれは、やつをあまりにもよく知っている。やつはおれの同窓生だし、二度おれの代診をやったことがある。やつがこの写真の男だ。こめかみの上の手術の痕も写っている。エメンベルガーの手術をしたのは、このおれだからな、この傷痕には覚えがあるさ」
フンガートーベルは眼鏡をはずして、右の胸ポケットへ入れてから、額の汗を拭った。
「エメンベルガーだって？」としばらくしてから警部は落ち着いてたずねた。「そういう名前かね」
「とうとう言ってしまったな」と不安になったフンガートーベルは言った。「フリッツ・エメンベルガーだ」

「医者か？」
「そうだ」
「いまスイスに住んでいるのだな？」
「チューリッヒの山中にゾンネンシュタイン病院を経営している。一九三二年にドイツへいき、それからチリーへ渡ったんだが、四五年にかえって来て、その病院を引き受けたのだ。スイスでいちばん金のかかる病院のひとつだよ」と彼は小さな声でつけ加えた。
「金持専用か？」
「大金持専用さ」
「科学者として腕はあるのかい？」
フンガートーベルは言いよどんだ。その質問に答えるのはむずかしいと彼は言った。「かつては優秀だったがね、現在も優秀かどうかは疑問だ。われわれにはどうしてもいかがわしく思える方法（メトーデ）で仕事をやっているんだ。彼が専門とするホルモンについて、われわれに分っていることは、ほんのわずかだ。そして科学がこれから征服しようとしているあらゆる分野のように、そこではいろんなものが右往左往している。科学者もいれば山師もいる。またこの二つをかねたやつも多い。ハンス、やつはさて何なのだろうね？　エメンベルガーは患者に好かれている。患者たちが彼を信じることは、まるで神を信じるようだよ。これは、あんな金持の患者にはいちばん重要なことだとおれは思うな。かれらには、病気もひとつの贅沢でなくちゃならんのだ。信仰がなくちゃどうにもこうにもならん。少なくともホルモンに関してはな。こういうわけで彼は大成功をおさめ、崇拝され、金儲けをしているわけだ。医者仲間では彼を金持のおじさん（エルブオンケル）とも言ってるよ」
フンガートーベルはエメンベルガーの綽名を言ったことを後悔するように、急に話をやめた。
「金持のおじさん（エルブオンケル）？　どうしてそう言うんだね？」
「やつの病院はたくさんの患者の遺産を相続したのだ」とフンガートーベルはうしろめたそうに答えた。「そうすることが、あの病院の患者の間で、流行のようになっている」
「それが君たちの仲間で評判になったんだな！」
二人は黙った。その沈黙の中には、フンガートーベルが怖れているまだ話されていないあるものがあった。
「君がいま考えていることを考えるのはよしたまえ」と医者は突然ギョッとして叫んだ。
「おれはただ君の考えていることを考えているだけさ」と、警部は落ち着いて答えた。「厳密に考えていこう。われわ

れの考えているのが犯罪のことであっても、その考えの前にたじろいではいけない。その考えを良心に照らして恥じない場合に、はじめて詳しく調査できるし、またわれわれが間違っておれば、その考えを克服できるだけの話さ。ところで、ねえ君、われわれはいまどういうことを考えているのだろう？　それは、エメンベルガーは、やつのシュトゥットホーフの強制収容所で身につけた方法を用いて、患者に遺産を強制的に寄贈させておいてから、かれらを殺しているということだ」

「違う」とフンガートーベルは、熱っぽい眼つきで叫んだ。「違う！」そして、ベールラッハを途方にくれたように見つめた。「そんなことを考えてはいけない！　おれたちは畜生じゃないんだ！」こう叫ぶと立ち上って、部屋の壁と窓との間をせかせかと往ったり来たりしはじめた。

「神よ」と医者はうめいた。「いまより怖ろしい時はありません」

「嫌疑はある」とベッドの警部は言った。そして仮借ない調子で繰り返した。「嫌疑はある」

フンガートーベルは、ベッドの横に立ちどまった。「ハンス、この話を忘れよう。おれたちは、どうも空想に走りすぎたようだ。人間が、ときどき可能性とたわむれたがるのはしようのないことだ。だがそれは、決していいことじゃない。もうエメンベルガーのことを考えるのはよそう。見れば見るほど彼に似てないよ。これは言い訳じゃない。やつはチリーにおったので、シュトゥットホーフにはいなかった。だから、おれたちの嫌疑は無意味なんだよ」

「チリーにね、チリーにね」ベールラッハの眼は、新しい冒険を求めて貪婪に光った。彼は伸びをし、それから両手を頭の下に組むとじっと横たわっていた。

「さあ、ザムエル、ほかの患者のところへいきたまえ」と、しばらくしてから警部は言った。「みんな、君を待っているぜ、これ以上君をひきとめたくない。この話は忘れることにしよう。それがいちばんだ。君の言うとおりさ」

フンガートーベルがドアのところで、もう一度うさんくさそうに病人のほうをふりむいたとき、警部はすでに眠っていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com